



商船については明治32年(1899)に船舶法施行規則細則が制定された。本細則では、漢字、ひらがな、カタカナ、漢数字を使用し、末尾に「丸」を付けることを厳しく指導した。外国の人からはマルシップと云われた。

この細則は昭和39年(1964)にアラビア数字の使用を認め、平成13年(2001)に「丸」を付ける行政指導が廃止され、平成16年(2004)には船名は全面自由となった。

船名に使用する「丸」の字体は、中の点を右まで延ばして九の字の真中を左上から右下へ貫通させて閉じる慣わしがある。九、すなわち〈苦を絶つ〉とか船の中心に隙間を作らず〈箱型を作って船を浮かす〉といった縁起を担いでいる。

Fig.2 は、昭和38年(1963)三菱下関造船所において進水した東京大学海洋研究所の研究船淡青丸(257.7総トン)の東京大学茅総長による船名揮毫である。

# 淡青丸

Fig.2 Writing for Ship Name

茅総長が揮毫された「丸」の字は慣わしのようになっていない。本船建造委員の高木、那須両東大教授は失礼を承知の上で秘かに書家を訪ねられて、Fig.2のように修正を施されたが、本船の進水式で船名をご覧になった茅総長はお気付きにならなかったとの事である。<sup>7)</sup>

## 2.2 わが国の命名儀礼

わが国の古代から中世にかけての進水式は、神官、僧侶、修験者、巫女などの聖職者が司会していたようであるが、江戸時代に入ると船大工の棟梁が司会する様式が出来上がり、木造船で最近まで見られた。これらの進水式では命名が行われることはなかった。

明治8年(1875)に横須賀海軍工廠で、明治維新後最初の洋式木造船産軍艦清輝(排水量 897 トン)の進水式が明治天皇の行幸を仰いで行われた。この進水式について横須賀海軍船廠史は次のように記述している。

天皇陛下ハ艦ノ側ニ設置シタル進水式台ノ玉座ニ臨御アリテ首長ウェルニーニ優渥ナル勅語ヲ賜ヒ 首長モ亦恭シク謝辞ヲ奉答ス 奉答終ワリテ奏樂起リ艦体ハ瞬間ニシテ海面ニ降下セリ<sup>8)</sup>

この文面からは命名儀礼を行った様子は見えない。

明治12年(1879)に川崎築地造船所で行われた私有の洋式木造船2隻の船卸しの式を、東京日日新聞は次のように報じている。

鳴鳳丸(洋式帆船 200 総トン)と小早川丸(洋式帆船 123 総トン)は、甲板上に美しい旗章を装って午後6時過ぎに水上に浮かんだ。この華麗なる式に大隈重信、川村純義、西郷従道をはじめ、大島圭介、荒井郁之助、実業界からは渋沢栄一、益田孝、岩崎弥太郎、荘田平五郎、大倉喜八郎、新聞社から福地源一郎、成島柳木らの名士が顔をそろえて出席した。<sup>9)</sup>

この文面からも命名の様子は見られない。

これら明治初期に始められた洋式船の進水式を見ると、建造する側と受取る側の双方が長い伝統がある進水式儀礼について詳しく知らなかったと推察される。そこにはわが国伝統の和船の進水式で重要な儀礼である「船霊様を祀る」と「進水の神事」は見られない。また欧米の進

水式で重要な儀礼である「命名」と「シャンパン割り」も見られず、Social event として出席する皇族や高位高官に同伴する女性の姿や招待された外交官の姿が見られない。

明治初期、明治政府は幕末に欧米各国と締結した不平等条約(治外法権と関税決定権)を改正をすべく、外交では岩倉使節団の派遣(明治4~6年)、寺島外務卿(在任; 明治6~12年)・井上外務卿(同明治12~20年)が外交交渉を行うなど努力を重ね、内政では欧米人が野蛮と見るであろうものを矯正し、欧米と同等の文明国になるべく文明開化を強力に推し進めていた。<sup>10)</sup>

明治18年(1885)3月31日に横須賀海軍工廠で、わが国最初の鉄骨木皮構造軍艦葛城(排水量 1,502 トン)の進水式が行われた。本艦は木造から脱皮し機関出力を増大して、従来の帆走主体から汽走主体にして西欧に追いつこうとする画期的なことであった。

進水式には天皇陛下のご名代として皇后陛下が行啓の予定であったがご不例により欠席された。しかし陛下の思召しで随行を予定していた伏見宮家令嬢、三条太政大臣夫妻、山縣参議ほか参議4名、内外の賓客百数十名を、特別に新造貨客船山城丸(2,528 総トン、速力 13 ノット)を備船して東京から直接横須賀港の間を送迎した。

本船は有事の際に仮装して軍艦とすべく共同運輸会社が英国に発注した優秀船で、竣工回航されてきたばかりの新船である。

時あたかも鹿鳴館時代の最盛期で、わが国で初めて駐在外交官に公開され、女性も招かれた進水式となった。

本艦の進水式を横須賀海軍船廠史は次のように記述している。

一同式場ニ着席ス 進水ノ準備全ク成ルヤ造船所長ハ之ヲ海軍卿ニ開申シ 卿命名書ヲ朗読ス 茲ニ於テ所長進水台ノ支柱ヲ脱却スルノ用ニ供セル錘綱ヲ切断ス<sup>11)</sup>

進水式では川村純義海軍卿が命名書を読み上げ、伊藤祐亨造船所長が支綱切断を行った。ここで命名の儀礼を男性が行ったが、英・仏・伊では主に女性が務めるがドイツでは皇帝や王族男子が命名者を務めることが多いことから、欧米人からみて特に違和感はなかったと思われる。

海軍省は軍艦葛城進水式の翌明治19年(1886)に「新造艦船命名式ニ関スル規定」を制定し次のように定めた。

第一条で命名の文言を

本艦何年何月構造ヲ始メ今船体成ルヲ告ク依ッテ進水式ヲ行ヒ何艦ト命名ス

○年○月○日 海軍大臣 爵 氏名

第二条で命名の所作を

進水ノ準備整頓スルトキハ海軍大臣本艦船ノ前面ニ設クル座台ニ立ち 命名書ヲ朗読ス 然ル後造船所長ハ進水台ノ支物ヲ打脱スルニ供スル錘紐ヲ一斉ニ切断ス

以上により進水式台上で命名者が船首の前に立ち命名書を読み上げ、次いで支綱切断者が支綱切断を行う所作が成文化された。これは海軍工廠と民間造船所で建造する艦艇に直ちに適用され、民間造船所で建造する商船もこれに追随して現在に至っている。

この命名儀礼の所作で「命名書を読み上げる」のは世界に例がなく、命名の文面に「祈り」がないのもわが国独特である。

命名儀礼のより詳しい所作を明治 22 年(1899) 3 月 12 日に横須賀海軍工廠で行われた軍艦八重山(排水量 1,600 トン、船質：鋼)の進水式について見てみる。この進水式には天皇陛下が臨御された。

午前十一時十五分 西郷海軍大臣中牟田鎮守府司令長官遠武本所長御先導ニテ式場ニ臨御アラセラレ 命名書ヲ大臣ニ御下附アリ 大臣之ヲ拝読ス 終ッテ造船所長同本艦ヲ進水セシム<sup>12)</sup>

また当時の進水式前の船名の取り扱いについてみると、船名候補を海軍省から上奏して通常は進水の 3~4 年前に決定されて海軍省内の文書に使用されていた。明治 19 年 3 月 13 日付の「未ダ進水式ヲ執行セサルモノハ仮ノ名号ヲ付セルモノト心得ヘキ」なる通達から、内部で広く使用されていたことがうかがえる。

本艦の船名決定時期は特定できなかったが、明治 20 年 6 月 7 日付で「本日鋼製第一報知艦八重山号ノ龍骨据付ニ着手セリ」の文言が横須賀海軍船廠史に記述されているから、本艦の船名は進水の相当前から海軍内部の文書で使用されていたことが判る。<sup>13)</sup>

上述の命名の所作と船名が事前に広く海軍内部で使用されていることを勘案すると、天皇陛下から下された命名書を海軍大臣が海軍大臣の名前で読み上げるのは、既に早くから決まっている船名を海軍大臣の名前で本艦に確認・告知すると共に、進水式の観衆や世間に広く披露する行為で、西欧の名付親の所作と大きな違いがある。そこに「祈り」は見られない。

明治 19 年に制定された命名書の文言は、その後 4 回改正された。2 回目の明治 28 年(1885)5 月の改正で次のようになる。そこでは命名の式とは云いながら、船名は周知の取扱いになっているのが注目される。

明治何年何月軍艦何何ノ構造ヲ始メ今ヤ艦体ノ成ルヲ告ク 茲ニ之ヲ進水セシム

4 回目の大正 3 年(1914)10 月の改正で命名書の文言は最終的に次のようになり昭和期まで使用された。

何種艦何 大正 年 月工ヲ起シ今ヤ船体成ルヲ告ケ 茲ニ命名ノ式ヲ挙ケ進水セシメラレ

商船の進水式で明治期や大正期に使用された命名書の文言に関する資料は未見である。

Fig.3 は昭和 3 年(1928)に三菱長崎で行われた日本郵船(株)の太平洋横断豪華客船シリーズの第 1 船浅間丸(16,975 総トン)の進水式で、日本郵船(株)社長白仁武が読み上げた命名書(左)とその包み紙(右)を示す。命名書には「本船を浅間丸と命名する」の文言が毛筆で料紙に書かれている。三菱長崎史料館所蔵である。

現在は商船、海上自衛隊や保安庁の艦船、官公庁船もほぼ同じ文言で同じ様式である。



Presented by MHI Nagasaki

Fig.3 Naming Paper for Launching Ceremony



Presented by MHI Shimonoseki

Fig.4 Naming Ceremony of KDD Ocean Link

平成 3 年(1991)8 月 1 日に三菱下関でケーブル船ケイディディ オーシャン リンク(9,510 総トン)の進水式が行われ、高田宮殿下が命名された。Fig.4 は命名書を読み上げられる高田宮殿下である。わが国の進水式における典型的な命名の様式である。

現在は、海上自衛隊や保安庁の艦船や官公庁船や大手商船会社では命名者が男性で支綱切断も行うことが多く、一般商船では命名者が男性、支綱切断者が女性の場合が多いようである。女性の命名者は稀である。

命名が済むと同時に商船では船首両舷舷側に書かれている船名を覆う紅白の幕が除かれ、艦船では舷側に船名が書かれていないので船名を書いた幕が垂れ下がって、船名が観客に披露される。

前者は明治 20 年(1887)8 月 20 日に石川島で進水した軍艦鳥海の進水式で、命名と同時に蔽い物を除くと仮名で書かれた船名が現れたという記事があり、これが最初と思われる。<sup>14)</sup>

後者は明治 24 年(1891)3 月 24 日に横須賀海軍工廠で行われた軍艦橋立(排水量 2,500 トン、船質：鋼)の進水式で、命名書朗読が終わると艦名を書いた幕が艦首両舷に垂れ下げられたとの記述がある。これが命名が済むと同時に船名を書いた幕を開き観客に船名を披露した最初である。<sup>15)</sup>



Presented by MHI Nagasaki

Fig.5 Hanging Screen for ship Name

Fig.5 は平成 23 年(2011)9 月 15 日に三菱長崎で行われた護衛艦てるづきの進水式で、命名の直後に舷側に垂れ下がった船名幕である。

薬玉に艦名を書いた垂れ幕を仕込んでおく方法も行われる。呉海軍工廠で明治 38 年(1905)に進水した戦艦筑波(常備排水量 13,750 トン)以降の建造艦や、昭和に入ると佐世保海軍工廠や舞鶴海軍工廠でも見られた。



### 3. 西欧の命名

#### 3.1 西欧の進水式

西欧で何時の頃から船名を付けるようになったかは定かではないが、5000年前まで遡ることができる。

エジプトの出土品の中に王室専用の遊覧船や大型軍船の船名がみられる。第1王朝 Qaa 王(2800BC 頃)の船に「王の船の指揮官」、第3王朝 Djoser 王(2620BC 頃)の船に「二つの地の崇敬」、新王国時代(1500BC 頃)の王家の船に「アメン神の愛でしもの」などである。この時期に進水式が行われていたか否か不明である。<sup>16)</sup>

古代ギリシャ時代(700BC~150BC)になって岸を遠く離れる航海が増えると、船乗りたちは風や波を司る隠れた力に畏敬と怖れを感じ、海の神 Poseidon にご加護を願うために Poseidon が持つ船名簿へ登録を願って、神や英雄、地名、鳥や動物、抽象的な概念に因む名などの船名を付け、Poseidon の目にとまり易いように船首に船名を刻んだ。現在の船首に船名を表記する起源である。<sup>17)</sup>

進水に際しては新船の甲板にワインをたらし、神 Poseidon をたたえた。その様子を詩人 Virgil は

人々はオリーブの葉の冠をかぶり  
神々の栄光をたたえてワインを飲み  
ワインを新造船に振りかけて祝福した<sup>18)</sup>

と詠ったと詩集 Aeneid (29~19BC)に記載されている。

古代ローマ時代(270BC~420AD)になっても同じ様に海の神 Neptune に幸運を願って船名が付けられた。

キリスト教が受容されると、カソリック教会が進水式を司祭するようになる。Fig.6 は 1486 年にドイツで発行された聖地巡礼の書籍の中に描かれた Venetia で行われた進水式である。船尾楼甲板で聖職者を中心に進水の儀礼が行われているのが見て取れる。<sup>19)</sup>



Fig.6 Launching Ceremony in Venetia (c.1480)

8 世紀頃から近隣の諸国に押しかけ略奪をほしいままにして猛威を振るった Viking は、船を進水させる時に捕虜などを生贄にして、Odin を主神とする信じる北欧の神々にご加護を祈った。<sup>20)</sup>

Viking は 11 世紀末にキリスト教を受容すると、山羊を生贄として捧げるようになるが、やがて代わりに銀の杯に満たした赤ワインを船首や甲板に注ぎ、済むと杯は海の神への贈り物として舷外に投げた。

#### 3.2 進水式での命名

キリスト教を受容した Viking は、海外進出から一転して身内で覇権を争うようになり、999 年から 1262 年にかけて威力ある超大型の Viking 船を何隻も建造した。その様様が 13 世紀にアイスランドで書かれた英雄物語サガに記述されている。

その中に、1182 年に現在の Thronheim の Nidelv 河で進水した全長約 42m、33 対の櫂をもち 320 人を乗せる超大型 Viking 船 Mariasuden の進水式が語られている。

観衆が見守る中、Sverre 王が次のように述べ命名した。我らの過ちの全てを許し給う神、神に祝福された処女マリアと聖 Olav 王に、本船が幸運に恵まれ、乗組員が危険からまぬがれるようお願い致します。私は本船が世界最大の巨船として、敵の攻撃をはねのけ、我々に幸運をもたらすことを確信します。ここにマリア様のご加護を願い本船を Mariasuden と命名する。<sup>21) & 22)</sup>

これが進水式で行った命名儀礼の最初の事例と思われる。この進水式で命名儀礼をもつ古代スカンジナビア人やデンマーク人が、航海や造船にたけた民としてイングランドに入植し同化していった。

1414 年 7 月に英国最大の軍船 Grace Dieu (排水量約 2,750 トン)が Souththampton で進水した。イングランド王 Henry V は Bangor (Wales)の司教に 5 ポンドを払いカソリックの洗礼の儀式に準じて盛大に命名させた。<sup>23)</sup>

英 Henry VII(1485~1509)の治世に入るとカソリックの儀礼に従って、儀仗を手を持った高位聖職者が、ろうそく、鐘、聖書、聖水の水盤を捧げ持つ一群の聖職者と聖歌隊を引き連れて、進水する船を祝福した。それが済むと華やかにトランペットが鳴る中を王が侍従を従え、進水する船の船尾甲板に上がり設えた玉座に座る。赤ワインを満たした貴金属製の脚付き大杯を受取り、儀礼的に口をつけてから小声で船名をささやき、神に本船の幸運を祈った。それから古代ギリシャの作法に従ってワインを甲板にたらし、剣の先で羅針盤の 4 点—東西南北—を描く。最後に脚付き杯を海の神に捧げるべく舷外に投げて下船した。<sup>24)</sup>

英 Henry VIII の下で宗教改革(1533)が行われると、カソリックによる進水儀礼はすべて廃止されたが、命名儀礼はそのまま続けられた。

命名者は王室や貴族の男性、高位高官や海軍士官が務めるのがそれまでの慣例であったが、当時の皇太子(後の George IV)が 1811 年に命名者を女性に定め、1818 年以降になると定着して、ドイツを除く西欧諸国もこれにならうようになった。これが現在も命名者に女性が多い理由である。

1854 年 5 月 17 日に Woolwich 工廠において 121 門搭載、三層甲板艦、蒸気機関搭載の戦列艦 Royal Albert の進水式が、Victoria 女王、夫君 Albert 公、女王の 3 人の王子と王女を迎え、それに多くの王族、高位高官が従い 60,000 人の大観衆を集めて行われた。Victoria 女王が命名者となり、力強く"Success to the Royal Albeert"と命名され、次いで船首に向けてワイン・ボトルを投げられた。Fig.7 に当時の週刊誌に掲載された挿絵を示す。<sup>25)</sup>

本進水式は国家元首たる女王が命名者を務めた初めて進水式で、以降は王室の女性が多く務めることになる。



Fig.7 Naming Ceremony of HMS Royal Albert (1854)

1874年10月にVictoria女王、海軍本部、Canterbury国教会大主教の間で、進水式の宗教儀礼を復活することが決められた。

1875年4月17日にChatham工場でAlexandra皇太子妃を命名者に迎えて行われた装甲艦Alexandraの進水式では、宗教儀礼と共に賛美歌107番23節を含む聖歌隊合唱礼拝がおこなわれた。<sup>26)</sup>

一方、18世紀から19世紀初めにかけてのカソリック・フランスの進水式は、幼児洗礼式に似て、godfatherとgodmotherの二人が主役で、双方が子供の場合も珍しくなかった。式は簡素でgodfatherが花束をgodmotherに贈り、二人で次のように船名を読み上げる。

“○○○, I baptise you in the name of the Father, and of the Son and of the Holy Spirit.”

牧師が繰り返し船名を読み上げ、ボトル割りはなく聖水を船首に振りかけて祝福し祈りを捧げて式を終了した。

19世紀になると、高位聖職者が侍祭や聖歌隊を従えてパレードし本船を祝福するとともに進水台にも聖水をふりかけた。大規模な進水式になると進水台に隣接して祭壇が設けられた。

西欧では、何時の頃か命名儀礼をChristening ceremonyと云い、命名者をGodmother、Godfatherと云うようになった。

近代入っての命名の文言の例を示す。

- “I name this ship ○○○, May God bless her and all who sail in her”
- “I name this ship ○○○ and may she bring fair winds and good fortune to all who sail on her”
- “I baptized you in the name of ○○○ and wish you your crew always happy journey”
- “In the name of United States I christen thee ○○○”

いずれの場合も進水台の前面に立ちシャンパン・ボトルを船首に当てて割った後に、命名書を読み上げるのではなく、普通の声かむしろ小聲で上記の命名の文言を述べて命名を行う。

#### 4. 結 び

世界で最も古いと思われる船名はエジプトの出土品から紀元前2800年頃から見られる。わが国で見られるのは西暦300年頃から、広く見られるようになるのは西暦1300年頃からである。

進水式で初めて命名の儀礼が行われたのは、西欧では西暦1182年にVikingの王SverreがノルウェーのThronheimで行った超大型Viking船Mariasudenの進水式で、わが国では明治18年(1885)に横須賀海軍工廠で行われた軍艦葛城の進水式である。

わが国の進水式中命名儀礼は、既に決まっている船名を進水する船に命名書を読み上げ告知する形を取るもので、わが国独特のものである。命名の文言に祈りは含まれてない。

欧米の進水式はキリスト教が受容されると教会が関与し、命名儀礼の儀礼はChristening Ceremonyと云われ、命名者はGodmother、Godfatherと云われる。命名者は依頼された船名を名付親として、命名書朗読ではなく乗組員と本船のご加護を願う祈りと共に普通かむしろ小聲で命名し、後見人として船の生涯を通じて義務を果たす。

一見すると同じように見えるわが国と欧米の命名儀礼とは、内容と背景に文化の違いが見られ興味深い。

#### 謝 辞

本論作成に当たって造船資料保存委員会内藤委員長、各委員および三菱長崎造船所史料館稲岡館長、三菱長崎艦艇部、三菱下関造船所、エムエイチアイマリテック(株)の方々にご指導、ご支援を頂き、また多くの方に調査の協力を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 倉野憲司校注：古事記，岩波文庫，pp187, 1963
- 2) 坂本太郎他校注：日本書紀(二)，岩波文庫，pp196 & 214, 1994
- 3) 金澤金光：和漢船用集，pp216 & 220, 1764 / 日本科学古典全書第十二巻，朝日新聞社，1943 所収
- 4) 品川区立品川歴史館：東京湾と品川ーよみがえる中世の港町 増補改訂版，同館，pp50, 2016
- 5) 石井謙治：和船，法政大学出版局，pp251 ~ 3, 1995.
- 6) 南波松太郎：日本船名「丸」の起源について，雑誌船の科学，第7巻12号，船舶技術協会，pp62, 1954.
- 7) 奈須紀幸：海に魅せられて半世紀、海洋科学センター，pp78, 2001
- 8) 横須賀海軍工廠：横須賀海軍船廠史第二巻ー自明治七年紀・至明治二十年紀，pp21,1915 / 明治百年史叢書，原書房，1973 所収
- 9) 三島康雄：川崎正蔵の生涯，同文館出版，96-8p,1993
- 10) 百瀬 響：文明開化 失われた風俗，吉川弘文館，pp29, 2008
- 11) 前掲 横須賀海軍船廠史第二巻，pp305
- 12) 前掲 横須賀海軍船廠史第三巻ー自明治二十一年紀・至明治三十年紀，pp33,1915
- 13) 前掲 横須賀海軍船廠史第二巻，pp331 & 376
- 14) 記事：平野氏造船所製造砲艦鳥海号進水式，工学会誌第69号，工学会，pp723, 1887-9
- 15) 前掲 横須賀海軍船廠史第三巻，pp110
- 16) D. ジョーンズ著、嶺岸・宮原訳：船とナイル-大英博物館古代エジプトを知る4，学芸書林，pp96 & 98, 1999
- 17) L.Casson：Ships and Seamanship in the Ancient World, The John Hopkins Univ.Press, pp334 ~ 60, 1955,
- 18) Virgil 著，A.S.Kline 英訳：The Aeneid, Bk 775-7, [www.poetryintranslation.com/](http://www.poetryintranslation.com/), pp139, 2002
- 19) Karl-Hartmann Necker：„...vom Stapel gelaufen, H.M.Hausschild GmbH, pp51, 2006
- 20) P.B. du Chaillu：Viking Ship Vol. , Charles Scribner's Sons., pp149, 1980
- 21) W. Brogger & H. Shetelig 著/K. John 英訳：The Viking Ship, Dreyers Forlag, pp151, 1971
- 22) J.Stephton 英訳：Sverissaga-The Saga of King Sverri of Norway, David Llanerch, 80 章, 1899
- 23) J.Endell Tyler：Henry of Monmouth or Memorirs of the Life and Character of Henry The Fifth Vol. , Richerd Bentley, pp131, 1838
- 24) R.G.Skerrett：The Baptism of Ships, pp213 / E.W. Benham et al.：The Ships of the United States Navy and Their Sponsors 1797-1913, The Plimpton Press, 1909, 所収
- 25) 週刊誌 The Illustrated London News：Launch of the “Royal Albert” at Woolwich Dockyard, Supplement, May 20, pp469 & 470, 1854
- 26) D. Baldwin：Royal Prayer, Continuum Internatinal Pub. Group, pp7, 2009